

令和2年度 東国文化自由研究レポート



研究テーマ

東国の古墳から
船の埴輪が出土しないのはなぜか。

提出日 令和2年8月24日



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

1年 1組 20番

氏名 丹沢 莉々佳

1. はじめに

古墳時代の群馬県地域は「上毛野国(かみつけぬくに)」と言われ、東日本随一の大国であったとされています。上毛野国には大きな勢力を有する豪族が多数いたことを示す、大小の多数の古墳があります。現在、群馬県内には約二千基の古墳が残っていますが、平成24年から行われた古墳総合調査では13,249基の古墳があったことが確認されています。

当時の日本の中心は近畿地方であり、政治・文化・経済の中心でした。4世紀～6世紀にかけて近畿地方から遠く離れた群馬地域は近畿地方と結びつきを強めました。そして、「上毛野国」は、東日本をリードする先進的な「東国」の中心であり続けたと言われています。

この「東国文化」には、他の地域と比較して、とても個性豊かな「形象埴輪」が数多く出土されています。私は夏休みを利用して、県内各地の古墳を見学し、そこから出土した様々な埴輪を観察しました。そのなかで私は「当時の東国で、これだけ多くの種類の埴輪が作られたのに、なぜ船の埴輪がないのだろうか？」という疑問を持ちました。

これだけ様々な種類があるということは、生活に使っていたものは埴輪としてつくっていてもおかしくはないと思います。そして、当時の生活の移動手段は馬と船だったわけですから、馬がつくられて船はつくられないということは何らかの理由があったのではないかと考えました。

この疑問を調べるため、東国の古墳や資料館の見学、東国文化に関してまとめられた書籍、日本各地で出土している埴輪についてのインターネット記事などを調べて、自分なりの考察を試みることにしました。

2. 古墳時代の東国について

(1) 文献調査

① 当時の東国の地形

東国、特に太田市を中心とした東毛地域は、利根川や渡良瀬川などの大きな河川があったことがわかりました。群馬県は海に面していない内陸に位置し、日本の政治をリードしていた近畿地方からもはるか遠くに位置しているにもかかわらず、古墳時代を通じて地域の中心であり続けました。

この地に残る多くの古墳から、古くから強い勢力をもった王や豪族がいたと考えられています(天神山古墳など)。強い勢力をもつためには、大人数の集落をつくる必要があります。そのためには、広い農地(水田)をもっていたと想像できます。平野に位置する東毛地区では、広大な土地や大きな河川による豊富な水資源を活用して、水田を拡大し、集落を発展させていったようです。その後、大和王権と強い結びつきをもつことで、より地域を文化的にも発展させていったと考えられています。

このように、この地の王や豪族たちにとっては、河川の利用が集落を治めていく上では、とても重要であったと考えます。また、大和王権との初期の交流においては、この河川が輸送面で重要な役割を持っていたと考えます。つまり、東毛地域は、利根川や渡良瀬川などの大きな河川を基に、その基盤をつくりあげていったと考えます。

② 当時の交通事情

縄文時代や弥生時代に日本に馬はいなかったようです。日本に馬が伝えられたのは、4～5世紀の古墳時代に、朝鮮半島から海を渡ってやってきた渡来人とともに、伝えられたと考えられています。馬だけを連れてきただけでは馬を繁殖させることができないため、その繁殖の技術をもった渡来人も一緒に連れてきたと考えられています。

馬は朝鮮半島から大和王権に伝わり、その後、大和王権から東国に伝えられたと考えられています。東国では、西毛地域を中心に(群馬県から長野県にわたる一帯)で馬の生産が行われ、大和王権に馬を献上するほどの国内屈指の馬の生産地となっていたと考えられています。古墳や遺跡の調査結果から、大和王権

から馬の飼育や生産の先端技術を備えた渡来人集団が東国に派遣された形跡が残っています。

私は、これらの中央からの技術集団や馬の運搬は、河川を利用した船の交通によって行われていたと考えています。

(2) 東毛地区の古墳見学

1) 塚廻り古墳群第4号古墳(太田市)

私は今回の調査で、初めて「塚廻り古墳群」という名前を知りました。資料で住所を調べて、現地見学に行ってみました。「塚廻り古墳群第4号古墳」は、あたり一面が水田のなかに、ひっそりとありました。まわりから見たときは、古墳の規模も小さいものでした(写真1)。

古墳から出土した埴輪の復元品が当時を再現した形で見事に並べられたこの古墳は、王を囲うように埴輪が並べられています。小さいながらも、様々な場面を表現した埴輪が豊富に並んでいることを特徴とした、とても立派な古墳でした。

写真1. 塚廻り古墳群第4号古墳(太田市)



写真2. 塚廻り古墳群第4号古墳(太田市)



①古墳形式… 帆立貝式古墳

②埴輪内容

- ・円筒埴輪にて全体を囲まれている(写真1)。
- ・「人物埴輪」…王と考えられる人物埴輪

写真3. 王様とひざまずく人の埴輪



ひざまずく人

「ひざまずく⇒お辞儀をしている」

様子を表現しています。

おさげのような髪形をしている人物。身分の高い男性が儀式など格式の高い場面である「下げみずら」という髪形です。また、籠手(こて)(手を守るための防具)、に加えて、腕飾りもしています。

椅子に座る王様

当時は身分の高い人のみが、椅子に座ることができたとされています。

- ・「動物埴輪」…飾られた馬の埴輪が2機
- ・「器材埴輪」…太刀の埴輪、ならびに、農工具の埴輪あり
- ・「家形埴輪」…家の埴輪

写真4. 馬と馬の世話をする人の埴輪



馬を世話する人
馬がいたことはもちろん、
世話をする人=繁殖させる人がいたことも
表現されています。

写真5. 馬の埴輪 その1



写真6. 馬の埴輪 その2



よく見て
みると、
馬の馬具
が微妙に
異なるこ
とがわか
ります。

③その他

小規模古墳ながら、埴輪が数多く使用されている理由として、太田市付近一帯の集落が、上毛野国の二大埴輪生産拠点であったことがあげられます。(県内では、ほかに藤岡市でも多数の窯跡が発見されています。)太田市の金山付近では埴輪の窯跡が多数確認されており、上毛野国の埴輪生産を支えていたことがわかっています。

2)太田天神山古墳

私の住む太田市には、天神山古墳があります。天神山古墳は、5世紀前半(古墳時代中期)に造られた前方後円墳です。古墳の大きさランキング(全国)で第26位ですが、当時の政権の中心だった奈良県と大阪府を除くと第3位、東日本では第1位の古墳です(写真7)。

東日本最大ということもあり、とても大きかったです。古墳は、木がおい茂る森のようです。実際に古墳に登り、頂上にたどり着いて下を見渡すと、かなりの高さがありました。その規模は「Google Earth」を使ってまわりの家と比べると良く分かります(写真7)。写真7の左が天神山古墳、右上が女体山古墳です。

写真7. 天神山古墳(太田市)



写真8. 天神山古墳(太田市)



①古墳形式…前方後円墳

②埴輪内容

水鳥形埴輪(首から上だけの頭部破片)が出土。

鳥としては大きく、白鳥である可能性が強いと考えられています。

白鳥の埴輪は、近畿地方の王の墓から出土しています。これは、ワカタケル大王が白鳥になって飛び立ったと言われており、天神山古墳からの出土は、埋葬者と大和王権とのつながりの強さを想像させます。

③その他

・石棺の現物は確認できません。

・盗掘にあったらしいのですが、残された記録から、石棺は長持型石棺であったことがわかっています。長持型石棺は、5世紀の畿内の最有力前方後円墳に限って採用されたものであり、「大王の石棺」と呼ばれています。

・埋葬者が、大和王権の最有力者層(それほどの人物が東国に派遣されていた?)の石棺であると考えられています。

・盗掘されていないければ、大和王権との関係性を考えれば、銅鏡や刀が埋葬されていた可能性が非常に高いと思います。

3)女体山古墳(太田市)

天神山古墳と比べると小さく感じてしましますが、大きかったです。野球場よりも大きいという規模の大きさに驚きました。

写真9. 女体山古墳(太田市)



①古墳形式…帆立貝式古墳

②埴輪内容…現物見学はできませんでした。

③その他

女体山古墳は、天神山古墳と同じ時期に、天神山古墳よりも後につくられたと考えられています。天神山に埋葬された人物の次の位を持つ者が埋葬されたと考えられています。また、2つの古墳が、①同じ方向を向いて造られていること、②女体山古墳が天神山古墳の約1/2のサイズにつくられていることから、この女体山古墳が、天神山古墳の横に意図的につくられたと感じます。女体山古墳に埋葬された人物は、天神山古墳に埋葬された人物が東国を治めるうえで、とても重要な人物だったと感じます。

わたしは、天神山古墳に埋葬された人物は東国の出身の人物ではないと考えており、この女体山古墳に埋葬された人物こそが、当時東国の出身のなかで一番力を持っていた人物であると考えています。

3)他に、太田市の大規模前方後円墳である茶臼山古墳と朝子塚古墳を見学しました。また、私が住む町にあるオクマン山古墳(円墳)を見学しました。オクマン山古墳からは、鷹匠の埴輪が出土しています。

(3)西毛地区の古墳見学

西毛地区屈指の古墳群である上毛国はにわの里公園にある、八幡山古墳、二子山古墳、かみつけの里博物館を見学しました。

1)八幡山古墳(高崎市) (写真10、写真11)

①古墳形式

前方後円墳。堀の内側に中島と呼ばれる島が4つ設けてあります。中島は古墳の埋葬者に対するまつりが行われた場所と考えられています。(写真13)。

古墳には石棺が残されていて、見学できるようになっていました。石棺は立派な船型石棺で、埋葬された人物がこの地域で大きな力をもっていたことがわかります(写真15)。また、当時この古墳の工事にかかわった人数は、延べ62,000人にもなるとのことでした。これは、この地域でそれだけの人数の人々が暮らしていたことを示しています。埋葬された人物が治めていた地域が大きな力をもっていたことが、ここからも見て取れます。

写真10. 八幡塚古墳(高崎市)



写真11. 八幡塚古墳(高崎市)



写真12. 八幡塚古墳(高崎市)



写真13. 八幡塚古墳(高崎市)



太田市の前方後円墳にはなかった「中島」とよばれる島が堀の内側に4か所つくられていました。

写真14. 八幡塚古墳(高崎市)



写真15. 八幡塚古墳(高崎市)



②埴輪内容

- ・円筒埴輪にて古墳全体が囲まれています(写真13)。
- ・「人物埴輪」…当時の様々な儀式の様子が埴輪で表されています。

写真16では、王が巫女と向かい合い、巫女が王に器を差し出す様子を表しています。

まわりには、王族、琴を弾く人、王に仕える女性などがいます。それぞれの人物や、装飾などがとても精巧に埴輪に表現されていることで、私たちはこれが何らかの儀式の様子を表していることが想像できます。琴を弾く人物の埴輪から、古墳時代の儀式では、現在の琴のような弦楽器を弾く習慣があったこと

が分かります(写真17)。

鳥を腕に据える男子の埴輪がありました。オクマン山古墳(太田市)から出土した鷹匠の埴輪が有名ですが、同じような姿をしているここでも埴輪が見つかっています。当時は鳥の世話をしていたことが分かります(写真18)。

写真16. 王と人々の埴輪



写真17. 琴を弾く人物埴輪



写真18 . 鳥を腕に乗せる人物埴輪



・「動物埴輪」・・・飾られた馬の埴輪や様々な鳥の埴輪があります。

水鳥やニワトリなどが表現されています。写真25の鳥は、首に鈴をつけていて、口に魚をくわえているところを表現しています。これは、鶺鴒の様子にも見えます。

馬の埴輪は、立派な馬具がついています。

また、狩人が猪に矢を放つ狩りの場面が表現されています。猪の埴輪は、血を流しているところまで細かく表されています。弓を持っている人物埴輪と、血を流している猪の埴輪と、それぞれの位置関係から、これが狩りのシーンであることがわかります。

写真19. 鳥の埴輪



写真20. 鳥の埴輪



写真21. 鳥の埴輪



写真22. 馬の埴輪



写真23. イノシシの埴輪



2) 二子山古墳(高崎市)

八幡山古墳と隣接する大型古墳です。

① 古墳形式・・・前方後円墳。

規模は八幡塚古墳より大きいです(写真24)。

八幡塚古墳と同様に、堀の内側に中島と呼ばれる島が4つ設けてあります(写真25)。

古墳からは石棺が出土しています。

こちらの古墳では、石棺のイメージがわかるように表示がされていました

(写真26)。

この地域では、大型の前方後円墳が3つ(八幡山古墳、二子塚古墳、薬師塚古墳)隣接してつくられていることから、何代かにわたって、力のある一族がこの地を治めていたことが分かります。

写真24. 二子山古墳(高崎市)



写真25. 二子山古墳(高崎市)



写真26. 二子山古墳(高崎市)



3. 調査を通じての疑問点と私の仮説

東国文化を彩る埴輪の生産には、東国の人々の豊かな感性が感じられました。その形象埴輪の種類は、「人物埴輪」「動物埴輪」「器材埴輪」「家形埴輪」ともに充実したものでした。

(1) 古墳が意味するものを以下に整理してみます。

- 1) 古墳は死者をとむらうための構造物。
- 2) 一部の権力者だけのものではなく、様々な階層の人が造った(吊われた)。
- 3) 大きさや形には意味がある。特に前方後円墳は、大和王権との強いつながりがある。

(2) 埴輪が表現したものを以下に整理してみます。

- 1) 富の象徴。
- 2) まつりごとの再現。
- 3) 生活の様子表現。

東国の中心地であった東毛、西毛の 代表的な古墳と埴輪を見学してきました。上記の古墳の形状などからは、東毛、西毛ともに 大和王権との強いつながりを持つ人物の埋葬に、多数の埴輪が備えられていました。そして、埴輪の中には、船の埴輪がありませんでした。

見学した古墳から出土した埴輪には、本当に様々な種類がありました。これだけ様々な種類があるということは、生活に使っていたものはすべて埴輪をつくって表現していてもおかしくないと思います。

これだけ、熱心にバラエティーに富んだ埴輪をつくった東国の人々が、馬の埴輪はつくり、船の埴輪はつからないことには、何かの理由があると考えられます。

私の仮説は以下です。

仮説 東国の人々は、意図的に船の埴輪をつくらなかった。

私が考える理由 1

「東国の人々が、船を見たことがなかった。」

私が考える理由 2

「東国では、大和王権から船の埴輪をつくることを禁じられていた。」

私が考える理由 3

「東国の人々自身が、船の埴輪を作ることを避けていた。」

私が考える理由 1

「東国の人々が、船を見たことがなかった。」について

4 世紀に入り、大和王権は東国の毛野と呼ばれる肥沃で広大な無人の平野に関心を向け、東海地方西部の土器文化を持った人々が多く、東毛の平野地域にも進出し、開拓を始めたと考えられています。それまで無人であった東毛の平野部を開拓するためには、大人数で構成された大開拓団でこの地にやってきたと考えられています。この開拓団は、船も使用して移動してきたと考えられています。東国の人々が、この時の船団を見なかった可能性はありますが、少なくとも王権から遣わされた人たちにとっては、船はよく目にするものであったはず

です。
また、大和王権との交流がさらに盛んになった時期、近畿から東国に派遣された人たちを運んだ船を、東国の人たちは見る機会がなかったはずはないと考えます。東国の人々が、船を見たことがなかったとの理由は、成り立ちそうにありません。

私が考える理由 2

「東国では、大和王権から船の埴輪をつくることを禁じられていた。」について

理由 2 の検証のために、船の埴輪について調べてみました。

船の埴輪の出土情報の調査には、インターネットでの検索を行いました。「船の埴輪」で検索してみると、全国ではいくつもの船の埴輪があることがわかりました。それは、九州や近畿での出土でした。いずれの埴輪も、それぞれの形をとらえており、船であることは間違いのないと思います。つまり、九州、近畿では船の埴輪が造られていて、船の埴輪を作ることが禁じられていたわけではないようです。

特に、三重県松阪市文化財センター所蔵の、宝塚一号墳出土品である船の埴輪は、王の権威を示すための細かい装飾が表現されており、富の象徴・まつりごとの再現をあわせ持っています。

しかし、私が調べた書籍やインターネット、現地古墳の見学を通じて得た情報の範囲では、東国での船の埴輪の出土報告は確認できませんでした。

東国では、6 世紀ごろに、最も精巧な埴輪の生産が行われています。(埴輪の中で唯一の国宝となっている

太田市飯塚町から出土した「珪甲の武人」も6世紀の生産と考えられています。4世紀から6世紀の300年間の間に、もし船型埴輪が東国で造られているならば、東国のいずれかの大型前方後円墳には供えられ、出土するはずです。逆に、出土しないならば、意図的に造られなかったと考えるほうが自然です。

東国は、古墳時代を通して大きな勢力を維持していたため、大和王権も一目置いていて、そのために、大和王権は他の地域より早く、東国との交流をしたはずで、馬は、東国で生産させたのちに、自分たち大和王権に献上させるため、いち早く東国に馬を育てる技術を伝えました。一方で、船の技術は大量に人や武器を運べるものであることから、大和王権は、東国に自分たちを攻撃させないようにするために、自分たちと同等の技術までは伝えないという選択をした可能性があると思います。そして、東国の首長たちの墓に、船の埴輪をそえることや、東国で船の埴輪を作ることを禁じたのではないかと考えます。

以下に船の埴輪の出土事例を紹介します。

(1) 藤井寺市教育委員会蔵(写真31)

大阪府藤井寺市岡古墳出土品である船の埴輪には、丸木舟の舟底に舷側板(げんそくいた)を追加した準構造船と呼ばれるものがあります。韓国の船型形象土器に構造がちかいものがあることから、半島からの技術が伝えられてきたものと思われる。5世紀ごろの作品と考えられています。

写真27. 船型の埴輪(大阪府)



写真28. 船型の埴輪(大阪府)



写真33. 船型の埴輪(三重県)



(2) 東京国立博物館蔵(写真32)

長崎県西都市 西都原古墳(さいとばるこふん)出土品である船の埴輪には、舳先(へさき)・艫(とも)にそそり立つ飾板が見て取れます。木をくりぬいただけの簡単なつくりではなく、上部にしっかりとつくりを持っているので、波の穏やかな湾内だけではなく、波の荒い外洋まで乗り出す船と考えられています。船の形の埴輪は、当時の大陸や朝鮮半島との交流を示しているとも、葬られた人の魂の旅立ちを表しているとも考えられているようです。

船は外洋の航海で交易する民にとってシンボルとなるものだったと思います。

(3) 三重県松阪市文化財センター(写真33)

宝塚一号墳出土品である船の埴輪には、他に例を見ない豪華な装飾が施されていて、船首と船尾(せんび)には、権威を象徴する複数の鰭(ひれ)状突起(魚のひれの形を表現している)で飾られていて、船体の中央にも、権威を象徴する蓋(きぬがさ)と呼ばれる日傘や、王の持つ杖とされる威杖(いじょう)が2本、威厳を示す大刀(たち)が立てられています。近畿の王のみが使用していたと思われる豪華な船が想像できます。

私が考える理由 3

「東国の人々自身が、船の埴輪を作ることを避けていた。」について

様々な埴輪をつくってきた東国の人々が、船の形埴輪をつくることを避けた理由を考えます。

長崎県西都市 西都原古墳から出土した船型埴輪は、海も活動拠点として暮らす人々にとってのシンボルであると同時に、葬られた人の魂の旅立ちを表していると考えられています。また、東国の有力者の墓である前方後円墳の石棺は、当初は船の形が使われていて(舟形石棺)いました。

私の想像では、東国の人たちは、船の形は死者を葬るための神聖な形であると感じていて、石棺には使用しましたが、埴輪に形として残すことを避けたのではないかと考えています。

東国最大の天神山古墳の石棺の形状は、舟形石棺から長持形石棺に代わったと考えられています。東国最大の勢力を誇った埋葬者の石棺の形には、船の形を選びませんでした。大和王権と同じ石棺で埋葬された古墳は、天神山古墳と、お富士山古墳(群馬県伊勢崎市)のみです。

私は天神山古墳に埋葬された人物は、大和王権とのつながりが極めて強いこと、舟形の棺に神聖さを感じないことから、この人物は大和王権から東国につかわされた人物であり、東国出身の人では無かったと考えています。

これまでの調査の結果、私は東国から船型の埴輪が出土しない理由は、
「船の形を神聖な形とらえていた東国の人々自身が、船の埴輪を作ることを避けていたことから、意図的に船の埴輪をつくらなかった」ためであると考えます。

今後の発掘調査で、東国の古墳から船の埴輪が出土しないのが楽しみです。
出土したら、また新しい疑問が出てくると思います。

4. おわりに

このレポートをまとめにあたって、初めて県内に残るたくさん古墳を見学しました。
今も残る古墳は、その大きさ、形状から、当時の東国の勢力の大きさ・権力の強さを物語ってくれます。そして、種類豊富な埴輪は、当時の文化や生活を物語ってくれています。東国の古墳は時代をこえて私たちに伝えてくれていました。その古墳をこれからも後世に残していきたいです。

【参考文献】

- ・群馬の古墳物語 東国の古墳と文化を探る <上巻> <下巻>
右島 和夫 上毛新聞社事業局出版部
- ・東国文化副読本
松島 榮治 監修 群馬県 群馬歴史文化遺産発掘・活用・発信実行委員会
- ・まんが 太田の歴史
漫画家 古城 武司 監修者 澤口 宏・長谷川稔・梅澤重昭・細谷清吉・唐澤定市・中島明・茂木晃
編集 太田市企画部広報広聴課 発行 太田市
- ・かみつけの里博物館 パンフレット
発行 かみつけの里博物館
- ・群馬 東国文化 ガイドブック
発行 群馬県生活文化スポーツ部文化振興課
- ・埋文群馬 No.64 創立40周年記念号
発行 公益財団法人群馬県埋蔵文化財団調査事業団
- ・東国文化ガイドブック ぐんま東国文化ものがたり
発行 群馬県
- ・社会科 中学生の歴史
発行者 帝国書院
- ・太田市ホームページ
- ・松阪市ホームページ 文化財センター(埴輪館)
- ・西都市ホームページ
- ・藤井寺市ホームページ
- ・東京国立博物館ホームページ